

「主役は、私」

今、夜の祈祷会では、ローマの信徒への手紙を学んでおりまして、パウロさんという人が書き残した非常に難解な神学理論を、こう言う意味かも知れませんが、とか、きつとこういう事が言いたいのでしょうか、とか、牧師も苦心しながら解き明かしています。パウロさんのお人柄や思想背景も影響していますし、そして、何はなくとも 2000 年という時間的な遠さがあるわけですから、難しいと思ってしまうのは、これは仕方のないことです。2000 年前の遠い西側の世界と、現代日本の我々が同じ理解や認識を共有していると考えの方が無理というものです。

しかし、日本の基督教の流れを振り返ってみますと、現代日本の我々も、2000 年前の西側世界と同じ認識を持たねばならない、という風潮があったように思います。「私たちは、洗礼を受けて、神様の子ども、神様の家族になったのだから、日本の文化・風習からは離れて、聖書に記された世界観の中を生きなければならぬ」。そして、行ったことも、見たこともない、葦の海の奇跡の話聞き、モーセの活躍を学んだり、エルサレム神殿というすでに一部の壁を残して崩壊してしまった幻の建物を頭の中に想像したりしています。私たちは、本当に努力を重ねて、時間にして約 2000 年以上、距離にして約 13,000km の遠さを、学んだり、祈ったりを通して、埋めようとしています。毎週日曜日のこの説教も、毎週水曜日の聖書研究会も、まさにその努力の顕れですよね。

私たち日本人が、聖書の世界観を理解しようとする、そういう努力が欠かせません。一方で、神様の愛と慈しみを真っ先に受け取った選民である、イスラエルの人々は、そういう努力が幾分か軽減されています。私たちが、カタカナの多さに苦戦し、見知らぬ文化に首をかしげながら、どうにかこうにか読み進めている旧約聖書について、イスラエルの民にとって、それは「自分たちの歴

史が書かれた身近なもの」なんですよ。やっぱり、それって、「さすが神様が選ばれた民だな」と羨ましく思います。私たちにとって、「桃太郎」とか「浦島太郎」とか「はなさかじいさん」とか、そういう昔話を聞いて親しむような感じで、イスラエルの人々は、この旧約聖書に親しみ、「我がこと」として聞くことが出来ている。また、旧約聖書に出てくる、カタカナ表記の読みづらい一つの地名や人名は、私たちにとっての、「江戸」であるとか、「飛鳥」であるとか、そういう歴史ある古い地名であり、また、「徳川家康」とか「聖徳太子」と言うような聞き覚えのある古い有名人の名前なわけです。普通に子ども時代を生きていれば、耳にすることのある、なじみ深いものだということです。

だから、今日の聖書箇所のような命令と言いますか、意気込みが、当たり前のように語られています。「わたしの民よ、わたしの教えを聞き、わたしの口の言葉に耳を傾けよ。わたしは口を開いて箴言を、いにしえからの言い伝えを告げよう。わたしたちが聞いて悟ったこと、先祖がわたしたちに語り伝えたことを。子孫に隠さず、後の世代に語り継ごう。主への賛美、主の御力を。主が成し遂げられた驚くべき御業を。」この御言葉を受け取ったイスラエルの民は、はるか昔の出エジプトの出来事から、今に至るまでの、様々な神様の御業を思い起こすことができたのです。それらは、全部、「自分たちの歴史」だからです。このあたりの認識は、異邦人である我々日本人には難しいと言わざるを得ません。どんなに勉強しても、どんなに聖書を読み込んでも、出エジプトの出来事も、バビロン捕囚の出来事も、遠い昔の、遠い国のお話です。牧師は、頑張って、それらの出来事を、今を生きる私たちに当てはめて説教を作るものですが、とは言え、牧師自身にとっても、やっぱり聖書に書かれている出来事は、大昔に完結してしまっている「他人事」です。残念ながら。

ただし、6節・7節の命令自体は、私たちにも意味のあるものです。「子らが生まれ、後の世代が興るとき、彼らもそれを知り、その子らに語り継がねばならない。子らが神に信頼をおき、神の御

業を決して忘れず、その戒めを守るために」。・・・「はい、分かりました、では、私たちも敦賀教会の教会学校の子ども達や、幼稚園の子ども達に、神様の御業と戒めを伝えていきましょう」。・・・でも、具体的には、何を伝えたらいいんでしょうか。後の世代である、子ども達が神様に信頼を置き、神様の御業を忘れないために、私たちは、何を伝えたらいいんでしょうか。出エジプトの出来事なのか。バビロン捕囚の出来事なのか。イエス様の奇跡の出来事なのか。十字架と復活の出来事なのか。パウロさんが苦勞してローマに辿り着いた出来事なのか・・・。あえて語弊を恐れずに言うなら、果たして、そんな出来事を伝えて、子ども達が「神様に信頼し、神様の御業を忘れない」ようになるのでしょうか。残念ながらならないと思います。もちろん、中には、興味関心を抱いて、「主の十字架は私の罪のため」と理解する子どもや大人もいるでしょう。ここに集まっている、私たちは、多分、そういう少々貴重な存在です。でも、多くの場合、遠く離れた2000年以上の前の出来事のお話は、今を生きる子ども達の心には届きません。「その子らに語り継がねばならない」という命令を守ろうとして、この詩編78編に、続けて記されている、出エジプトや、カナン入植や、アッシリア捕囚・・・、アッシリア捕囚とはバビロン捕囚の前に起こった、北イスラエル王国が滅ぼされた出来事ですが、そんな遠い古い出来事を、私たちが語っても、あまり意味はないのだと思います。それは、ここ日本に生きる私たちの歴史でもなければ、子ども達にとって馴染みのあるお話でもないからです。さっき言った、「桃太郎」とか「浦島太郎」とか「はなさかじいさん」の昔話を聞かせるように、あらゆる世代に対して、聖書のお話を気軽に語り、そして、気軽に聞いてもらえればいいんですけどね、今更、それも難しい、と感じることが多々あるかと思えます。

しかし、だとしても、「その子らに語り継がねばならない」という命令は、信仰継承や教勢回復のためにも、無視はできません。私たちも何らかの福音や、主の御業を「その子らに語り継がねばならない」。さあ、いったい、何を語り継いでいったら良いのでしょうか、と。

ところで、話はちょっと逸れますが、神様の御業と言うのは、聖書に書かれているものが全てでしょうか？ 旧約聖書の創世記 1 章 1 節から、新約聖書のヨハネの黙示録 22 章 21 節までに、神様の御業や、福音や、愛や、恵みは、すべて書かれているのでしょうか。私は、違うと思います。聖書に書かれていない御業や、福音や、愛や、恵みは、山ほどあります。私たちは、どうしても日本の歴史と、聖書の伝える歴史を切り離して考えがちですが、私たちの信じる神様と言うのは、世界の創造主であり、全知全能だと私たちは知っているわけですよ。であれば、我が国・日本が辿ってきた歴史だって、神様の支配下にあったと、信じてても別に何の問題もないわけです。縄文・弥生・飛鳥・奈良・平安・戦国・鎌倉・室町・安土桃山・江戸などなど。別に、明治期に我々のプロテスタント教会が日本にやってくる前の時代にだって、そこに神様の御業はあったはずですよ。まあ、あまり、そのことを強調しすぎると、とたんにオカルトっぽく聞こえてしまいますから、「神様の御心で、徳川家康は江戸幕府を開いた」なんて言いませんが、でも、キリスト教が伝来した土地の、伝来した後の歴史にだけ神様が関わっていて、それ以外の場所や時代には、神様は関わっていないなんて思うのは、これは、神様の全能性を否定する考え方のようにも思うわけです。非常に極論ではありますが、「神様は全てを支配されるお方」と信じるなら、江戸時代の日本にも、そこに神様の支配は及んでいた、と考えることも決して間違いではないでしょう。この敦賀教会にしても、敦賀教会の歴史自体は、今年で 115 年を迎えますが、115 年前に突然、神様の御業が起こったわけではないでしょう。神様の御言葉を聴くことを約束された人たちが、140 年とか 150 年前に敦賀には生まれていたと考えられます。神様によって、敦賀教会創立以前から、敦賀には御業と御心が実現していたわけですよ。そういう敦賀を舞台にしたキリスト教昔話があっても、いいんじゃないかと思います。

あと、もう一つの視点から言えば、今を生きる私たちは、聖書に登場してくるたくさんの人たち

と、何か違うところがあるのでしょうか？ エルサレム神殿に詣でて犠牲の捧げものを捧げた人と、教会に通い献金を捧げる私たちとは何が違うのか。預言者の言葉を聞いて、喜んだり悲しんだり、また時には腹を立てたりする人々と、牧師の説教を聞いて、喜んだり悲しんだり、また時には腹を立てたりする人々と、何が違うのか。神様の愛を信じて言葉を紡いだ詩編の作者と、神様の愛を信じて讚美歌を歌う私たちと、何が違うのか。イエス様の御言葉を聞いて癒され、励まされ、喜び勇んで帰っていった元病人と、聖書の御言葉に癒され、励まされ、週毎に敦賀の街に派遣されていく私たちと何が違うのか。聖霊によって力を与えられ、ペンテコステの日に一生懸命に証しをしたペトロたちと、聖霊によって言葉を与えられて、教会学校の説教をしたり、教会詩編纂のために作文を書いたりした人たちと、いったい何が違うのか。・・・きっと何も変わらないと思います。私たちと、聖書に登場する多くの人たちは一緒です。同じです。どちらも、神様に会い、イエス様に支えられ、聖霊に満たされて、祈り、賛美し、福音を宣べ伝える、大切な存在です。

という事で、話を前に戻します。私たちも何らかの福音や、主の御業を「その子らに語り継がねばならない」と言われているわけですが・・・、語ること、いっぱい、あるじゃないですか。教会に通い、祈る中で、感じていること。得られたこと。献金をする時に考えていること。讚美歌を歌っている時の気持ち。聖書の御言葉のここが好きなんや、とか、昔、教会でこんな嬉しいことがあったな、とか、めちゃくちゃ楽しかったんよ、とか。別に、聖書に書かれている大昔の、よく分からん場所の、カタカナばかりの出来事を語らなくなって、今を生きておられる神様から頂いた、新鮮で分かりやすい、たくさんの福音や御業が、たくさんあるはずですよ。私たちは、もちろん、聖書から御言葉を聞き、養われていくわけですが、私たちの人生そのものが聖書と同じくらい福音に満ちていると知ってほしいと思います。私たちの人生に刻まれた福音や御業を、子ども達に語っていくことって、とても大切です。これまた語弊を恐れずに言えば、イエス様を知らない人に十字架や

復活を伝えるよりも、その伝えるべき人の目の前にいる「わたし」が、イエス様を信じて楽しく優しく喜んで過ごしていることを伝える方が、よっぽど良いんじゃないかと思います。父・子・聖霊なる神様の導かれる歴史と人生の主役は「わたし」です。聖書の登場人物ではありません。信仰の主役は、間違いなく「わたし」です。どうか、そのことを忘れず、「わたしの人生に起こった素敵な御業」を語り伝えていく、そんな日々を、これから続けて参りたいと願うものであります。お祈りを致します。

神さま。

今日も、私たちの上に、尊い安息日を備えてくださり、心から感謝致します。あなたは、聖書に書かれている古い時代から、私たちの生きる新しい時代に至るまで、眠ることなく、まどろむことなく、支え導いてくださっています。そのことを知り、私たちは日々新しい賛美をあなたに向かって捧げて参ります。どうか、私たちの毎日の幸いを、そして、私たちが続く新しい世代の幸いを、あなたがお守り、お導きください。私たち一人ひとりを、主の肢として、福音の宣教者として、十分に用いてください。あなたが私たちの人生において示し、顕された素晴らしい御業を、次の世代に語り伝え、させてください。新しい言葉で、私たちの言葉で、あなたの栄光を子ども達に宣べ伝えることができますように。聖霊による知恵と力と言葉とを、私たちにお与えください。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。